

## 事例 5

# 地域との連携、地元での自走化を見据えた取り組み

## 北九州芸術劇場

岸本匡史

公益財団法人としま未来文化財団 としま区民センター・野外劇場運営課

### 事業概要

北九州芸術劇場と北九州市身体障害者福祉協会アートセンターとのコラボレーションによって制作されたダンスプロジェクト及び公演が「レインボードロップス」である（振付・構成・演出：セレノグラフィカ）。障害のある人もない人も一緒にダンスを楽しむことをコンセプトに、それぞれの個性や可能性を発揮できる作品づくりを行っており、毎年のワークショップのほか、2016年、2020年と今までに2度、稽古を経ての公演を実施している。

## 地元福祉団体との出会い

2013年にプレ事業、14年にワークショップとしてこのプロジェクトはスタートした。当時10周年を迎えようとしていた北九州芸術劇場が地域との関係を見直す中で、北九州市身体障害者福祉協会（以下、福祉協会。翌年からアートセンターを立ち上げ）が行っていた障害者芸術祭で「発表会」と出会ったことがきっかけとなった。

福祉協会は障害者芸術祭を毎年開催しており、「障害がある方や関係者は見にくいが、それ以外に広まらない、もっと知ってほしい」という積極的な課題を抱えていた。その福祉協会と、地域との連携や多様な方々との取り組みを推進しようとしていた劇場の方針が一致し、専門性は違えども、どちらも一緒に同じゴールに向かおうと、この企画はスタートした。

## ワークショップから公演へ

初年度のプレ事業は、障害者芸術祭にも出演しているメンバーで開催した。障害者芸術祭の実行委員長や身体障害者福祉協会の職員（いずれも障害当事者）は、芸術祭でバレエや日舞のワークショップに自ら参加・開催もしており、劇場側からの提案であるコンテンポラリーダンスにも積極的にチャレンジ。翌年度からは参加者を公募している。

ワークショップを続け4年目の2016年には、活動の成果として公演「探せ宝を、虹のふもとに！」を小劇場で開催する（9月18日）。もとの参加者の関係者のみならず、福祉協会が繋がっている福祉系の学校、知的障害者など幅広く声をかけた結果、最初から多様な方々が参加した。参加者の親御さんも最初は見学だけであったが、一緒に参加するようになっていった。

発表会ではないクリエイション公演の反響は大きく、参加した地域のアシスタントはアートセンターと共に活動を開始し、観客として見た当事者もその後のワークショップに参加するようになるなど、活動は広がっていった。

## 地元による自走化を目指し、再び公演を開催

活動が活発になるに従い、再び公演をという声上がり、第2回目の公演を開催することになった。参加者と地域の人々が出会う機会を増やすためにも、目標を「皆に見てもらう」「講師を含めて地元による自走化へ向けて」と定め、プレ事業から携わっているセレノグラフィカのおふたりと、プロジェクトのスタート時からアシスタントとして参加する地域のアーティストに引き続き指導を依頼した。

2020年、2ステージの公演として「こんなにも、家族」を開催、盛況の内に閉幕した（2月9日、11日）。

2つの公演を通して障害のある方と接することで、担当のみならず、劇場のスタッフの意識が変わり、そうした個人の理解が、今、組織全体へと緩やかに浸透し始めている。



## 可能性は地域にある

北九州芸術劇場の取り組みは、劇場が地域へと目を向けたとき、可能性はそこにあることを証明した事例ではないだろうか。福祉協会の発表会が、劇場、アートセンター、地域のアーティストによる連携へと発展したことの意義は大きい。担当者は「この事業を始めた時は、正解もないし、とりあえずやってみようというところからスタートした」と語っていた。最初から高い理想を掲げ、そこに向かってゼロからスタートするのではなく、今ある団体と一緒に進めていったこと、そして、目標を最初から固めるのではなく、走りながら、修整しながら定めていったことは、今後この分野に取り組む劇場には参考になる事例だ。

「劇場の稽古場＝非日常の空間に来るということ自体が精神的ハードルとなり、慣れるまでに時間を要した」といったような苦勞も参加者から伺った。こういった実際に進めてみなければわからないことや学んだことは、貴重な財産として今後に活かされていくに違いない。

劇場での公演に障害当事者が観劇しに来ることはまだ少ないという課題もあるが、これも舞台公演へのアクセシビリティを充実していくことで、この事業の意義をより広げていけるチャンスと考えられるのではないだろうか。



## 北九州芸術劇場

住所：福岡県北九州市小倉北区室町1丁目1-1

概要：2003年、市立美術館分館や映画館も入る複合商業施設・リバーウォーク北九州内に、旧小倉市民会館の機能を引き継ぐかたちで開館した市立劇場。「劇場文化を育む」というミッションの下、「観る」「創る」「育つ」「支える」という4つのコンセプトに沿って、多様な事業を展開している。多目的の大ホール（1269席）、演劇専用の中劇場（700席）、平土間の小劇場（96～216席）を備え、コンサート、演劇からミュージカル、歌舞伎まで幅広く上演し、幅広い世代に親しまれている。管理運営は公益財団法人北九州市芸術文化財団。

